



青春

林 京子

新潮社



せい しゅん
青 春

- 著者 ^{はやし きょうこ} 林 京子 ●発行者 佐藤亮一
●発行所 株式会社新潮社 〒162 東京都新宿
区矢来町71 振替 東京4-808 電話 営業部(03)
3266-5111 編集部 (03)3266-5411 ●印刷所 東洋
印刷株式会社 ●製本所 加藤製本株式会社
●1994年2月20日発行

価格は函に表示してあります。

© Kyoko Hayashi 1994, Printed in Japan
乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社読者係宛お送り下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

ISBN4-10-600655-3 C0393

青

春

I

初夏の海から強い風が吹いてくる。波の飛沫を吸った風は浜に上ると突然様子を变えて、白く泡立ってくる。白い風が吹くと、町は海水をたっぷり含んで霞み、道を歩く犬も人も塩っ辛くなる。関東地方は、昼過ぎから大雨になるそう。予告の雨が一粒一粒、ガラス戸に水滴を打っていく。

速い雲の動きのために、光の揺れが大きくなった部屋のなかで、私は村田風子が呉れた手帖を繰っている。表紙は、七夕の宵に踊る小町踊りの輪を描いた、古い千代紙である。少女が着ている夏衣と、太鼓を打つ科が可愛いので褒めると、使いさしよ、とおいていった。あなたの秘め事は沢山、と私は手帖を押し返した。女学生時代、風子は日記帖や中学生からもらった恋文を、よく私にみせたものである。風子は笑って、書いてあるのは人生の滓ばかり、と掌にのせた。

手帖には、旅先での走り書きが二つ三つある。ほかに私のメモがある。風子が訪ねてきた日の話を思い出しながら、心に残った言葉や感想を書いたものである。

へいびつなトマトの断面みたことある？ 芯は地軸に向って真っ直なの〜

「AGAIN!」私は自分の内部に非常に多くの過去をかかえている」。この内は誰だったかの文章。

「春風や 堤長うして 家遠し」

メモまでとりながら、そのときの感情の昂りは薄れて、風子のブラム色に塗った唇から吐かれた声だけが、蘇ってくる。いつも風子は、十年に一度ぐらいの割合で予告なく訪ねてきて、声だけ残して帰っていった。艶のある声である。しかし聞いていると声は形をとりはじめて、ビニール製のビーズ状に固まって、頭のなかを転がり出すのだ。叩いても割れないビニール玉。命を感じさせない声。さりとて消えてもくれない。氣にしているうちに、大半の話は素通りしてしまう。比較的確かな手応えとして残っているのが「春風や 堤長うして 家遠し」。

花ばなの蕾に暖かい湿り気を運ぶ春風を背に受けて、かげろうが立つ長堤をゆったり歩いていく一人の男。緑の草も歩いていく男も——男は和服の着流し——駝蕩として眠っているよう。向かう家は遙かに遠い。

女学生のころに習った句の解釈を私に聞かせてから風子は、上野遼に逢ったときね、忘れていたこの句の、のどこでどこか哀しい風景が浮かんだの、といった。いいえ、その反対かしら、情景に重ねて上野さんの顔を眺めていた——。青春時代に出逢った誰彼の情景だったのかもしれない、といった。

コーヒーカップについた、紫色の口紅を指先で拭きながら風子は、早まったと思うわ、いま考

えれば離婚しなければならぬほど純粹で、潔癖な行為が、男にも女にもあるとは思えないものと還暦を見送った者の余裕をみせてから、これからお墓を買いにいきます、といった。

鳥葬か風葬が、風子の理想だったはずである。訊ねると、買いにいく墓の主になる風子は、入る墓決まってるの、つて子供たちに聞かれたの、といった。みにいく墓地は日本海を見下す、峻しい岩山の頂にある。縁もない、訪ねたこともない北国である。浮き世から遠すぎる山の墓地を選んで、永遠に、一人で住むのだそうだ。

親の墓参りなんて面倒でしょう、人里離れた山のなかだと無沙汰のいいわけがたつじやないと風子はいいい、その時期がきたつてことよわれわれ昭和つ子にも、と晴ればれとした笑顔をみせた。ね、けもの道しか通つていない山のてっぺんに墓地を拓くなんて粹だと思わない、その坊さま、とも。

粹で、少なからず捻くれ者の坊さまの心意氣に便乗したのが、風子を晴れやかな氣分にしていくらしかった。結婚までの経緯をあれこれ話す氣になつたのも、墓を買う肚を決めたからのこと。きつと最後の大きなお買い物でしょうよ、といった。

最後の買い物に出かけていく女学校時代の友人を、木枯しが吹く駅まで私は送つた。

あの日から半年が経つだろうか。話を辿つて、風子の来し方を綴ろうと思う。風子が呉れた手帖は、もう私のものなのだから――。ただ、墓を買つた話ではない。同じ関東に住んでいながら、結果の報告は、未だに受けていないのである。

上野遼と風子が再会したのは一九七四年、昭和四十九年の二月。二十三年ぶりの再会だった。

風子はその日の様子を、〈宿の庭に笹と松。松の下草に残雪あり。曇り空なのに黄金の陽がそぐ奇妙な京都の冬景色〉と手帖に書いている。

さらに一九九〇年の一月に、二人は再会した。終わった年号の年を数えるなら、昭和の六十五年。再会の年から十六年の年月が過ぎている。風子は還暦。上野は定年退職していた。

大阪での再再会は、〈天王寺界限を上野と歩く。真っ直歩かんかい、後から、自転車走ってきた中年男の罵声。上野、眉も動かさずひょうひょうと歩く〉としている。

再会の約束をした日、風子は京都駅から歩いて四、五分かかる、ホテルのロビーで上野遼を待っていた。朝七時半である。

前日ホテルに着くと、その夜、風子は上野の自宅に電話をかけた。ふた昔も音信がなかった風子からの電話に上野は驚いて、よう番号判りましたな、何かありましたか、と聞いた。

風子が答えないうちに、あしたいきますわ、ちよつと早いですが七時半、どうですか、といった。故郷の訛りなのか、住んでいる大阪訛りなのか。ぼきぼき言葉を切つて、話がひと区切りつく語尾だけを、風に預けるような話しかたをする。待ち合わせ時間の早さに、風子は声をあげた。会社九時までにはいかなりませんから、と上野がいった。問答無用の話しぶりは、ポツダム大

尉殿、と風子たちが仇名で呼んでいた青年時代のままである。昔なじみの気安さから、六時に起きななりませんなあ、と口調を真似して風子が出た。

なんです、と上野が出た。

七時半に人に逢うためには、少なくとも一時間前に、床を出なければならぬ。風子は、俯せて眠る癖がある。そのせいで、朝目が覚めると瞼が腫れている。腫れた瞼に寝床の温もりを感じさせて愛らしいのは、幼児ぐらいである。これも昔の話だが、瞼の重い女性は鬱陶しいですな、と上野が出たことがあった。

翌朝、早めに風子はロビーに降りて、隅にある喫茶室で睡気ましのコーヒーを飲みながら、上野を待った。泊まり客らしい男が一人、トーストを食べていた。男の背後は一面の透明ガラスで、ガラス越しに築山がみえる。

夜中に雪が降ったのだろう。築山の松や椿の蕾に、雪が積もっている。土くれのでこぼこにも風の刷毛あとをつけて、雪が積もっている。それらの上を、鞍馬や比叡の雪に映えた光が、きらめきながら翳っていく。

ぼんやり眺めている冷えた景色のなかに、上野が現われた。上野はロビーの入口を探しながら、ガラスの内を窺っている。間違ひなくそれが上野であることを確かめてから、風子は手をあげた。上野の目許に笑いが浮かんだ。

グレーのレインコートを着た上野は、ポケットに両手を入れた姿で、風子の前に立った。娘時

代より好みが派手になった風子に、随分おうてませんなあ、といってソファにかける。上野や風子、それに井川剛が勤めていた「中国研究会」以来の年月を指折って、四半世紀ですなそろそろ、と風子はいった。

四半世紀にもなるのか、と上野は過去を思い返す表情をみせた。

しかし風子さんは声が若いですな、変わりませんわ、と上野がいった。そのころ上野も風子も井川も、二十代だった。

声だけですの、と風子は艶めいた声で聞いた。上野は、のど仏が鋭く尖った長い首をあげて、くっく、とのどの奥で笑った。

僕に聞いて欲しい話って何ですか、と上野は昨夜の電話を気にして、聞いた。

確かに東京駅を発つまで、風子は悩みをかかえていた。信頼できる人に話を聞いてもらいたい。そしてその人の判断で、善しも悪しも行動を決めよう。信頼できる第三者の立場にある人物として、上野が浮かんだ。

そのころ風子は、人間不信に陥っていた。自信過剰気味の風子は、自分を除いた誰もが不誠実な人間に思えて、ノイローゼ気味だった。ことに、もっとも身近で信頼したい夫が、不実な人間の筆頭にいた。

だが車窓から、めまぐるしく移る、ごみごみと乱雑な家並みと生活風景を眺めているうちに、相談するのは止めよう、と思うようになった。どんな正当な解答をもらっても、この薄汚れた人

の世から逃げ出せるものではない。どうしても人の真が欲しいのなら、この世から出ていくしかない。あるいは髪を落して、己にこもるか。風子自身も嘘の多い人間である。自己を殺せないのなら、嘘も裏切りも、八方美人のその場限りの言葉も、身中の虫として共に飼って、素知らぬ顔で生きることだ。そう決めると気が楽になって、風子は、日頃は特に好きでもないステーキを夕食にとった。掌や足の裏にまで脂っ気をにじませて部屋に戻ると、また物哀しさに襲われた。話を聞いて欲しい、と上野に電話をかけたのである。

向合ってみると、そうもいかなかった。兄妹のようにじゃれあっていたむかしの仲間は、家庭と、社会的な地位を身につけた大人である。風子は、昭和二十五年から六年にかけて勤めていた中国研究会の、友人たちの消息を知りたい、ことに死んだ井川と江田の話を詳しく知りたいし、研究会があつた街にもいつてみたい、とその場を繕つていった。

上野さんが黒竜江で泳いでいた軍隊時代のお話もね、といった。それだけのことで、と上野がいった。そして、みんな忘れて暮してましたわ、と遠い景色を見極めるように目を細めた。

風子は、皮の薄い上野の顔と、背筋を伸ばして坐っている脂肪のない肩、平たい胸に目をやった。五十歳になったのだろうか。

上野は陸軍士官学校の、五十七期生である。満州国陸軍軍官学校の、二期生でもある。兵科は歩兵で、士官学校受験者のなかから約百六十人が、満州国陸軍軍官学校の生徒として、入学した。軍官学校で予科教育を了えた上野は、留学生待遇で神奈川県座間にあつた陸軍士官学校本科、

の教育を受けた。卒業の後、入学時の約束の地である、満州国の任地で軍務に就く。満州国軍の、第一師騎兵第四十五団に上野は配属された。

二・〇のみえすぎる視力と鋭敏な頭脳で、満蒙の荒野を馬上から睥睨していたのである。

当時、騎兵のモットーとされていた「軽快機敏、果敢断行」の姿勢が、サラリーマンに変身した上野に、一風変わった雰囲気をもたせていた。いや、敗戦直後の時代に、一風変わった雰囲気をもたない人間などいやしない。ただ上野は、果敢断行の行動を心の内に起こしながら、思いとどまることが多いために、それが、屈折した雰囲気になって現われていた。

話していくうちに、次第にむかしの仲間の顔をみせてきた上野に、また依頼心が湧いた。人を信じるって至難なことですね、と風子はいった。上野は、すぐに返事をしなかった。注文した紅茶を一口飲むと、われはここにて老ゆるなり、ですな、といった。四十歳を過ぎたばかりの風子は、上野の悟った答えを聞いて、後悔した。

いま直ちに老いるというのと違いますよ、騎兵の伝承歌ですわ、人生それだけのことと違いますかあ、と上野はいつて、絶望的になるとこの一節を口ずさんだものだ、といった。

われはここにて老ゆるなり、心静かになりませんか、繰り返し念仏のようにつぶやいていると、といった。上野は、年寄り臭いですな、といったから、「騎兵の単細胞」って井川がようからかいましたわ、といった。井川が死んだのは二十六歳か、七歳。早すぎましたね、と風子がいった。覚えてますか、彼、広告取りに出る前に、いてくるでつ、と僕の肩力まかせに叩きよりますね、

おう、つて応えると、締めているネクタイを肩に、こう、ふりあげましてね、出ていきますのや、自分に気合い入れてたんでしような、と銀ねず色のネクタイを肩に放りあげてみせた。

トーストを食べ終わった男が、読んでいたスポーツ紙をおいて、席をたった。出張者のようである。そのほかに客はおらず、オイルショックの影響なのか、ホテルは活気がない。上野が腕時計をみる。あした休暇をとりますわ、あしたの朝ここで待ってます、二、三日はいるのでしょ、と翌朝の九時半にロビーで逢う約束をして、出ていった。

ホテルの玄関まで送って出た風子に、黒竜江で泳いだこといつ話しました、と上野が聞いた。中之島公園の中国語の勉強会で、と答えると、ほう、と上野は頬をゆるめて、あの河、岸辺はゆるやかですね、泳ぎには自信があるのでぱーっと飛び込んだんですね、河を斜めに泳いで戻ってこようと……流れが凄いですわ、盛り上った流れの中心に近づくにつれて流されっ放しですね、水ですか、冷たいですわ夏でも、九月にはみぞれが降りはじめますからね。満州に征って僕がやったことは黒竜江で泳いだことと、満馬に乗って地形探索に出たことぐらいですな、とポケットに入れた両手で体をかばうようにして、歩いていった。

若いころは、長い腕を所在なげに垂らして、ふらりふらりと歩いていた。腕だけでなく、長身の自分自身を持て余しているように、風子にはみえた。

上野遼が所属していた満州国陸軍軍官学校と、満州国軍について、大東亜戦争のころ少女だっ

た風子は、上野の話を聞くまでその存在も、「日系兵士」が満州国軍に組み込まれて戦っていた事実も、知らなかった。「満系兵士」がはらからの地で、日系兵士とともに同胞と戦っていた矛盾も、知らなかった。風子は戦争の莫訶不思議を、重ねて思った。女学校三年生の夏、八月九日の原子爆弾投下の日に目撃した戦争と戦場の、不思議。捕虜として捕われていた連合国軍の兵士が、連合国軍の爆撃で死んでいった不思議である。味方によって消されていく者たちの死を、戦争という大義で昇華する不思議。矛盾を呑み込めるのは上層の人たちで、上野たち青年将校は矛盾と向合って、悩みの多い軍隊生活だったことだろう。

満州に征って僕がやったことは黒竜江で泳いだことと、満馬に乗って地形探索に出たことぐらいですな、という上野の言葉は、矛盾を生きた者の、ものいわぬ姿勢に思えた。

上野は昭和十六年、一九四一年に中学校から陸軍士官学校を受験、合格している。上野の言葉によれば、当時は消耗品だったのでごろごろ採用されましたわ、だそうである。

ごろごろといっても、天下の秀才の集団であったのは、衆知のことだ。

当時の新京の郊外、拉々屯にあった軍官学校から座間の陸軍士官学校に戻った昭和十七年には、空と陸の機械戦におされて、上野が憧れていた騎兵科は、幕を閉じていた。

さいわいにも満州国軍には伝統と栄光を受けた騎兵隊が、まだ勇姿を誇っていた。荒野とか、ネイシの丘陵が続く満蒙の敵情偵察には、訓練された馬と、騎兵の緻密な洞察力と判断が、必要だったのである。